

方面軍司令部(北部九州なれど所在地は忘却す)に着いたところ、係官より本日正午天皇陛下の重大放送があるから謹聴するよう指示があり、司令官以下一同前庭で耳を傾けた。時々御声が聞こえにくいところもあったが、ポツダム宣言を受諾して終戦を告げ、これ以上国民に犠牲を与えるに忍びないこと、堪え難きを堪えて行かなければならないことを切々と訴えられたことは、今でも脳裏にハッキリときざみこまれている。

その瞬間、遂に来るべきものが来たと感じ、かねがね敗戦の色濃いと判断はしていたものの、現実には遭遇すると、今後我が国はどうなるのだろうかという不安を拭いさることが出来なかつた。兎に角一応は原隊に復帰せよとの指示であつたので、部下と別れて独り三年余を過ぎた懐かしの久留米から、帰りは九大線經由で夕方佐伯駅に下車、自坊には軍務中なのでやらす養賢寺に宿を願つた。当時納所さんは私の労を慰らうため、取っておきの酒一本を衣の袖の下にして船頭町の「すし安」に招待してくれた。当夜は久しぶりに、遮光のない電灯で過ごすことが出来た。明るい夜は久々のことで嬉しかった。

翌十六日、日豊線に乗車せるも延岡迄、五ヶ瀬川鉄橋

は敵の爆撃のため不通、下車し徒歩にて南下中、隸下師団の軍用自動車を通りかかったので呼び止めて便乗し、都城迄辿りつき知人宅に一泊し、翌十七日午前中に漸く原隊の財部にある軍司令部に復帰した。

永い永い苦しい戦争も漸く終わったが、虚脱感をどうすることも出来ない、八月十五日。

『八・十五はこうして迎えた』

高橋 徹

私は左記のような戦地を経て終戦の日を迎え、そして更に三ヶ年を捕虜生活ですごした。

応召↓比島↓中国↓満州鶏寧↓東寧↓蛟河、命令のまま転属しその間、もしもあの時に、逃れ生きてきたことは幸運というよりしかない。然しまた、戦友の死を眼に焼きつけたままに今あるは誠にすまない。まさにこれは余命というものであろうか。

二十年八月は新設守備隊の下級将校として転属し、間もなかつた。その前任地東寧歩兵部隊では、狼の遠吠多

い山地に入り、後方防禦陣地を構築中であつたから、後方の蛟河転属は嬉しかつた。もうソ連の諜報活動は激しく、現地人を使つての我軍の様子は手に取るようだつた。

八月九日、夜間爆撃が蛟河駅を火にした時、我が守備隊は何の対応も出来ない重火器皆無の集団だつた。かつて無敵関東軍を自負した精鋭軍は南方軍へ大移動、その穴埋めにロートル召集兵を掻き集めていたこともソ連は知つていた。国境陣地は全滅させられて無人の野を侵攻して来たソ連に対し、我が部隊は急いで兵器弾薬を調達せねばならないが、平時受領では間に合わぬから直接装備すべく、臨時態勢で進発、途中の野営は満人集落を遠くに避けた。私はこの時切迫した責任感に重圧された。前の任地でも小隊の分担区で五十人余りと起居したが、今度は指揮如何によつては生命を直撃する。敗走の前線情報にも尚更に臨死感が増した。

八月十五日であつたのか思い出せぬが、部隊長の將校全員集合の命令であつた。「時は今……」の感いよいよ強まつたが、何となく様子が変だつた。そして司令部命令による終戦詔勅に従うようにと伝達された時の虚脱感、幸か不幸か憤激した將兵はいなかつたように思う。若い

現役がいなかつたからではあるまいか、残念ながら憶い出さないのはどうしてであろう。ただ、野に没する夕日の美しさは覚えている。それからどのようにして蛟河に帰營したのか憶えていない。前線將兵の戦闘は以後も続き終戦は知らされなかつた。通過する列車には鈴なりの邦人が南下して行つた。

ソ連の戦車隊が侵入してきた時、まるで戦艦主砲座のように見えた。こんな戦車群の下にタコツボ戦法でどうして阻止できようか、この日から武装解除が始まつた。將校帯刀の面目だけは許されたが、周囲の満人の眼は豺狼さむらいの眼だつた。食糧テントは襲われ、現地除隊の者も翌日は丸裸で帰營してきた。治安に八路軍を使い、兵器・被服・糧秣等の占領を急いだ、全くの火事泥だつた。敗走死捕虜の惨めな姿だつたが、これ以上に悲惨な邦人に何の助力もしなかつた軍の無力さに慚愧にたえない。

今なお、満州孤児日本訪問の話テレビで聴くたび、忘却の彼方に消えんとする東満各地のあの日々を憶い出そうとするこの頃である。

一九九二年九月 記